

親族語彙に見られる待遇意識

—— 現代日中両語の対照研究から ——

陳

露

はじめに

人間のコミュニケーション行動は様々であり、言語的なもの、それに付随して現われるもの、そして、非言語的なものなどが共存していることが多い。言語面から見れば、話し手と聞き手、そして伝達内容さえ揃えば、コミュニケーションが可能になるが、人と人との複雑な関係が必ず絡んでいるため、それを無視してコミュニケーションを行なうことは不可能であろう。話し手と聞き手、話し手（または相手）と話題の人物といった、人間関係によるなんらかの影響が、当然見られることが想像される。また、伝えられる話題や、そのコミュニケーションが行なわれる周囲の状況についての配慮も、人間のコミュニケーションを大きく左右することと思われる。従って話し手が、それらを自分に対して上下、尊卑、対等など、その位置関係のいずれに見なすか、つまりどのような待遇意識が働いているかが言語形式を決定するものであると言えよう。

社会での人間関係の処置法、把握法によって待遇表現の形式は異なる。言語環境、言語構造、人間の社会的関係といった言語の文化的背景の相違から、言語表現の違いが生まれると考えられる。

その待遇意識が文化的背景の異なった日中両語において、どのように現われ、またそれはいかなる形で言語形式に影響しているかを、親族語彙に視点を当て、現代日中両語の対照研究を通して考察してみたい。

親族語彙を含めた呼称形式は、集団の中の人間関係を象徴し、人々の対人意識を反映するものであり、ある文化様式を規定する要素の中で、最も重要なものの一つであると思われる。それに対する著書や論文には、鈴木孝夫氏、日向茂男氏、輿水優氏、木村英樹氏、蘇徳昌氏、董将星氏、彭国躍氏らのものが挙げられる。これらの文献中に、日中両語を比較して呼称の問題を論じたものがあるが、話し手と聞き手、話題人物間での社会的関係を示す「同志、大～、小～、老～、さん、ちゃん」等の形態素や「家庭、職場」等使用される場面を取り上げた種類と用法、その相違を考察するものが多かった。

本稿では、待遇意識の視点から現代日中両語の親族語彙を取り上げ、その体系、実態を明らかにしたい。親族語彙の仕組みがどのようなになっているか、その仕組みを支配している意識はどのようなものであるかを、日中両語の親族語彙体系の中で、それらを対照させながら、具体的に考察してみることとする。

研究方法としては、待遇意識が親族語彙にどう反映されるかに焦点をあて、親族語彙の体系の成立を支配しているその意識を、文化的社会的背景に関連させながら、先行研究をもとに内省法を加えて考察する。さらに客観性を求めるために、親族関係体系表の作成及び用例は、中国語、日本語それぞれにおいて若干名の方々に確認したものを使用する。

第一章：現代日中両語の言語表現と待遇意識

(一) 待遇意識と表現の言語形式

社会生活の中で、我々は円滑なコミュニケーションのために話し手は聞き手への心配りを大切にしている。我々が言語を使って対話を行なう場合、無意識的にその人との位置関係を判断して言葉遣いを選ぶ。つまり、相手のことをどう称すべきか、どう待遇すべきかは、対人関係を考慮した上での表現のしかたを決定する。

表現の様式を大きく左右する待遇度を決める要素として、年齢、性別、地位、階層、場所などにおける「目上・目下」、「内・外」、「親・疎」、「尊・卑」など様々な尺度が挙げられる。それぞれの尺度で測られた相手との「距離」で、待遇度を決めるものであると考えられる。

異文化社会の間においては、文化の背景の相違から待遇意識の差異が生じた結果、言語の表現形式の違いが生まれると思われる。

日本語においては、対聞き手意識は相手をどの程度の関係として待遇するかという点が最も重要な問題となるために、語彙選択や表現形式の選択に強く影響している。話し手と聞き手との位置づけ、使うべき敬意表現のレベルの判断、年齢、社会的地位、内外、親疎関係、公的場所と私的場所などに対応する表現法により言語形式が左右される。このように対聞き手意識と日本語の独特な文構成のもとで、日本語の待遇表現体系の成立が可能になったのであると言える。

中国語においては特に、現代中国（1949年以降）において身分の上下、尊卑関係から平等的連帯関係へという、人間の社会的関係の変化が言語表現にも影響を与え、敬語の破壊にまで及んだと言われていた。しかし現代中国語の言語形式には、対等意識が強く働きながらも、尊卑意識がまったく反映されていないというわけではない。

(二) 現代日中両語の言語形式と待遇意識

日本語の待遇意識は、形式の整った敬語に表わされている。待遇表現には尊卑表現を中心に、尊敬表現、対等表現、軽卑表現、疎遠表現、親愛表現などの種類に分けられる。待遇意識は名前や名称などの指示対象と他者尊敬や自己謙譲等、待遇的意味を決めれば、言語構造の中で記号化された特定の形態を使用して表現される。その特定の形式には、井出祥子氏、彭国躍氏(1994)がまとめたように、尊敬語、謙譲語と丁寧語があり、尊敬語には①語彙形態に基づく「おっしゃる」、「召し上がる」など、②接頭語や接尾語がつく「お〜、ご〜、〜さま、〜さん」など、③文法構造に基づく「お〜になる」、「〜られる」などの形式、謙譲語には①語彙形態に基づく「参る」、「存じる」など、②文法構造に基づく「お〜する」などの形式、丁寧語には「です」、「ます」、「でございます」のような形式を

持っている。このように尊敬語と謙譲語が、表現素材間の人間関係を、丁寧語が話し手と聞き手との人間関係を表現するように、人間関係は特定の言語形式によって記号化され、表現される。

中国語の場合は日本語のように、特定の形態をもって待遇的な機能を果たすことができない。文法的により、語彙的に表わされるものが多い。これに関しては輿水優氏(1977)、木村英樹氏(1987)に詳しい指摘がある。①語彙形態に基づくもの、例えば対者尊敬の動詞「光臨」、「賜教」や自己謙遜の動詞「拝訪」など、②接辞的な要素が付加したもの、例えば、限られた一部の動詞に「賞～、拝～、奉～、敢～」など、名詞に「尊、貴、高、上、大、敝、卑、賤」などがついたタイプがあるが、これらの表現は、敬語使用のコンテキストを離れれば、敬語としての機能的意味を失ってしまう。③人称、呼称等。しかし親族呼称の場合は、「お兄さん」のように日本語の親族呼称がなんらかの敬語の敬称形式であるのに対して、中国語のそれは、敬語であることの特定の形態的な記号をもたない。④社交用語、おぎなりの挨拶語などがある。現代中国語のもう一つの敬語的特徴と言え、それは呼称の問題が待遇表現の中に大きな比重を占めていることである。現代中国語では、人の呼び方を除き、言語的に敬意を表わすものに乏しいと言えよう。

(三) 待遇意識と親族語彙との関わり

すでに述べたように、相手に対する待遇度の現われ方は、呼称の問題に深く関わっている。中国語の場合、敬意表現など対人意識が多く呼称に反映されるのは事実である。日本語の場合も、相手をどう称するかはその人に対して使用される、言語形式を決めるものであるから、決して無視されてはならない。

相手に言い及んだり、呼びかけたりする場合、日本語では、人称代名詞、名前、親族呼称、地位名称、職業名称など様々な言い方が考察される。呼び方の原則については、鈴木孝夫氏は、親族間での呼び方を土台に考察した。(『ことばと文化』岩波書店、昭和48年『ことばと社会』中央公論社、昭和50年)「目上・目下」という基準にその原則を見いだし、さらにこの親族間での呼び方の原則が社会的場面にも拡張して当てはめられることができると指摘している。

中国語の場合は親族名称の体系に上下尊卑、内外親疎意識がはっきり反映されており、その原則は日本語と同様に社会的場面にも拡張して、さらにその用法は日本語以上に広がっているように見える。そこからまず、親族名称の仕組みと、待遇意識との関連を明らかにする必要が生まれてくる。それについて、次章から具体的に見ていくことにする。

第二章：現代日中両語の親族語彙と待遇意識

(一) 定義の確定と待遇意識の尺度

1. 親族、親族語彙、親族名称、親族呼称

『日本国語大辞典』によれば、親族とは「同一の血縁及び姻戚関係にあるものの総称、親類や縁者」である。親族は血縁、婚姻関係による人間の組み合わせであり、夫婦、親子を中核とする家族とその親類を含めていることが明らかになっている。

日本の民法によれば、六親等内の血族、配偶者及び三親等内の姻族を親族という。中国の場合は、本人を基点にして、上下の四代を含めた父系の血族及びその配偶者らが構成するものは近親と言う。これ以外の傍系及び子孫は同族と言い、本人の玄孫以下の傍系は親族と認めない。いわゆる「四世同堂」、「五世同堂」は、この父系の家族制の反映である。

親族語彙とは親族関係を表わす語彙の総称である。このうち、父、母、おじなどを言及する時に用いるものは親族名称と言い、当人に向かってその人を直接呼びかける時に用いるものを親族呼称と呼ぶ。

2. 待遇意識の尺度

ここで、親族関係は次の側面からみることができる。一つは、配偶者以外の親族を本人の世代を基準とした、その前後関係を「尊属・卑属」、「目上・目下」という意味的概念である。一つは配偶者以外の親族の系譜関係が、直通か否かによる「直系・傍系」という側面から「親・疎」、「内・外」という意味的概念である。『日本国語大辞典』によれば、目上とは「自分より地位、階級、年齢などが上であること、また、その人。或いは、親族関係で自分より身分が上である人。目下に対していう。」と解釈されている。言い換えれば、親族関係においての目上とは、自分より上の世代に属するもの、自分と同じ世代の者との間では、年齢が上の者を指す言葉である。

(二) 現代日本語、中国語における親族関係

1. 考察範囲

本稿では、現代日中両語で、祖父母の代から孫の代まで合わせて五代の親族関係を表で表わし、それをもとに、日中両語の親族語彙の仕組み、そしてその仕組みを支配している意識を考察していくことにする。

2. 現代日中両語における親族関係表

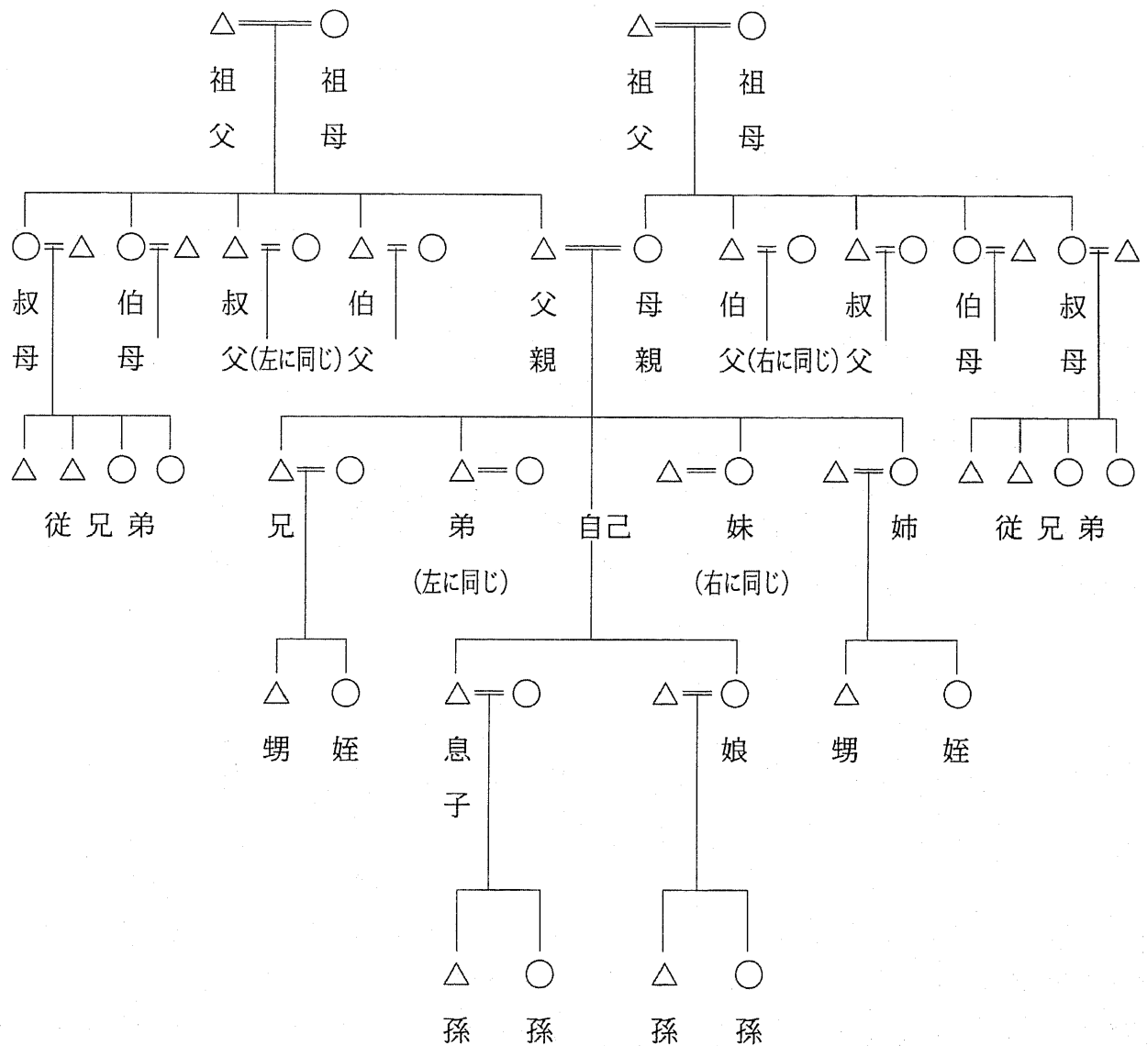
日本語における親族関係表：

符号の説明：＝ 夫婦関係

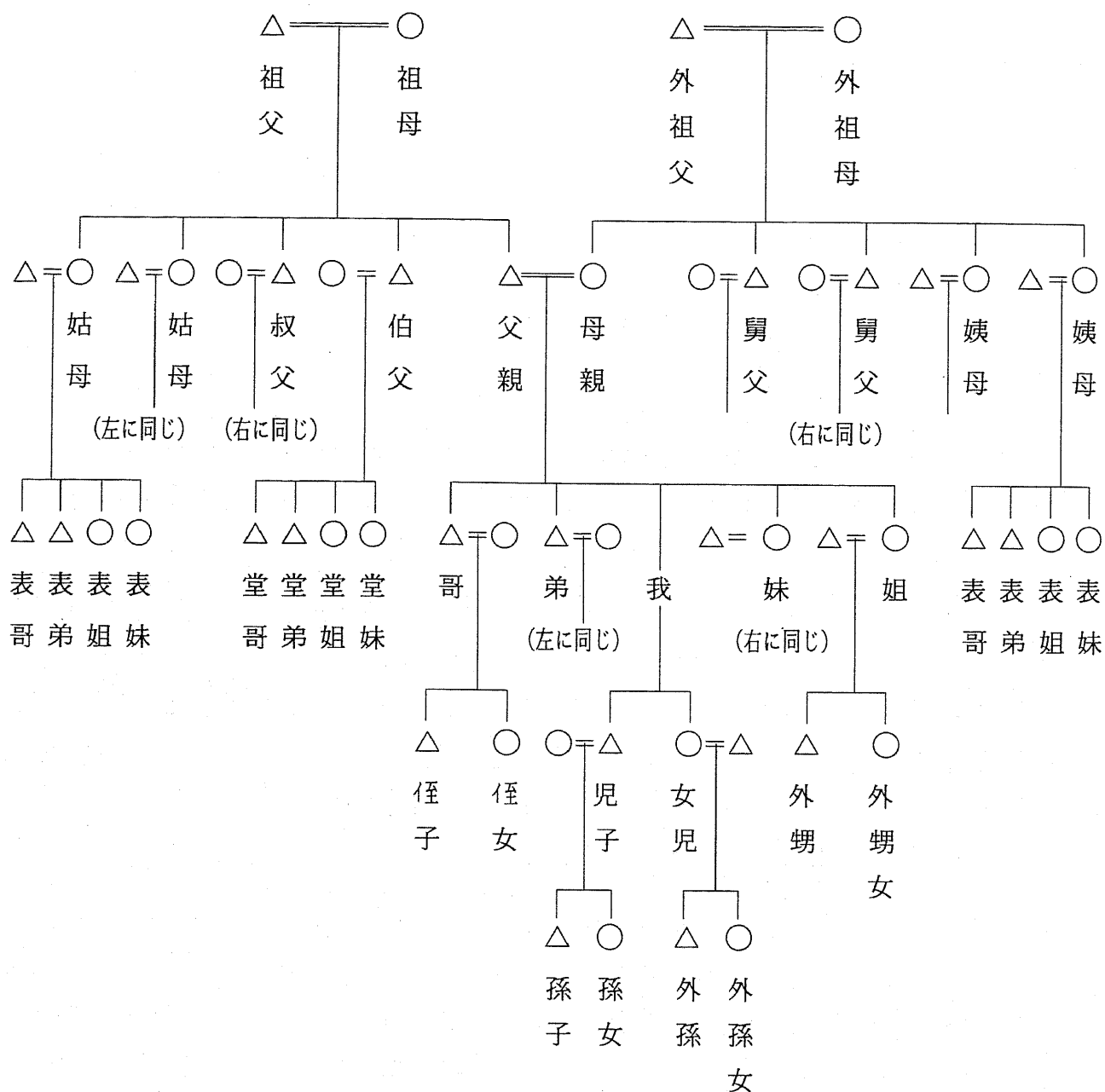
△／○ 男／女

└ 兄弟関係

┆ 親子関係



中国語における親族関係表



(三) 親族語彙に見られる待遇意識の日中比較

以下、自己を座標とし、縦横の軸に沿った、具体的な言語的事実を考察していく。

1. 性別意識

祖父母の代から見てみると、日本語の場合は、親の親を「祖父、祖母」、親の兄弟を「おじ、おば」、親を「父、母」、兄弟を「兄弟、姉妹」、子供を「息子、娘」、兄弟の子を

「甥、姪」のように性別によって区別する語彙がある。中国語の場合は、それぞれ「祖父、祖母」、「伯／叔／舅父、伯／叔／姨母」、「父、母」、「兄弟、姐妹」、「兒子、女兒」、「侄子／外甥、侄女／外甥女」のように、日本語と同様に性別によって区別する。しかし、直系の「子の子」、傍系の「親の兄弟の子」を表わす名称においては、日本語にはそれぞれ「孫」、「従兄弟」と一語だけであり、性別を入れて表わす言葉が無いが、中国語にはそれぞれきちんと「孫子、孫女」、「堂／表兄弟、堂／表姐妹」と分けて表わすのである。

中国語における男女意識がそれほど強いことは親族語彙によく反映されているといえよう。それゆえ「男女有別」（男女の秩序を守るべし 注以外は筆者訳、以下同）、「嫁出去的女兒撥出去的水」（嫁に行った子はよそ者）など、男女の序別を歴然と示す言葉が多い。

2. 「内・外」意識

(1) 中国語の場合：

中国語の親族名称における「内外意識」に関しては、上野恵司氏（1997）に詳しい指摘がある。

従来中国の家族制度は、男系の血縁関係に基づく父系家族制度であった。上野氏によれば、父方は「内」であるのに対して、姻戚関係によるつながりである母方の親族は母を除き、全て外扱いされるという。この父系家族制度のもと父方と母方に分けて親族関係を表わす語彙は、今日の社会までそのまま使われている。

例えば、家族内の最上位の世代にある祖父母であっても、母の両親は「外」の字を冠し、「外祖父、外祖母」という名称が用意され、父の両親である「祖父、祖母」と区別されている。

親の兄弟、つまりおじ、おばの場合、父方のおじは「伯／叔父」、母方のおじは「舅父」であり、父方のおばは「姑母」、母方のおばは「姨母」と称される。呼称としても、父方のおじは「伯伯／叔叔」、母方のおじは「舅舅」であり、父方のおばは「姑姑」、母方のおばは「姨媽」と、それぞれ区別を設けて呼び掛ける。さらに、ここに注意すべきことは、父の兄弟、つまり父方のおじにおいては、父より年が上か下かによって、「伯父」、「叔父」と名称が異なるが、母方のおじにおいては、一律に「舅父」と称する。それは父方の兄弟は「内」の人であるのに対し、母方の兄弟は「外」の人であり、父方に準じた区別であろう。おばの場合は父方、母方とも、親の姉妹を問わず、それぞれ「姑母」、「姨母」一語だけである。それはおそらく、父方のおばであっても、他家に嫁ぐものである以上、親族序列の区別は無意味であるからであろう。

孫の場合、息子の子は「孫子、孫女」と称されるが、娘の子は「外」をつけて「外孫、外孫女」と称される。

従兄弟の場合は、「堂」と「表」を使って、「内」と「外」を区別する。「堂」とは同族の意味であり、大家族制のもとで「内」の人と認められる。それに対し、「表」とは姻戚

関係によるものであり、「外」の人と見られる。従って、父の兄弟である伯父、叔父の子には「堂兄／弟／姐／妹」という名称があり、呼称としては「哥／弟／姐／妹」と自分の兄弟のように呼んで内扱いするのに対し、父の姉妹の子と、母の兄弟姉妹の子には「表兄／弟／姐／妹」という名称があり、さらに、父の姉妹の子は「外表兄弟」と、母方の兄弟姉妹の子は「内表兄弟」とのように峻別されている。

兄弟姉妹の子の場合は、「内」と「外」の関係は「侄」と「甥」を用いて峻別する。兄弟の子は「侄子／侄女」と、姉妹の子は「外甥／外甥女」とそれぞれ名称が異なる。

(2) 日本語の場合

日本語には中国語のように、男系であるか女系であるかによる「内」と「外」を峻別する意識は働いていないようである。

父方の祖父母も、母方の祖父母も「祖父、祖母」と称する。

おじ、おばの場合は、父方も母方も親より年長であるか年少であるかにより「伯父／伯母」、「叔父／叔母」と漢語系の語彙で区別するだけであり、両方とも「おじ、おば」と称する。

孫の場合は、区別なく「孫」を用いる。

従兄弟の場合も、父方、母方か、男か女かを問わず、一律に「いとこ」と称される。

兄弟姉妹の子の場合も、男女を区別するために用いられる「姪、甥」以外は、男系女系による「内・外」意識は見られない。

(3) 親族関係を表わす合成語

同世代、或いは世代を超えた親族間の組み合わせを表わす言葉を取り上げて見てみよう。

① A：祖父母と親

祖父母と親との組み合わせを示す言葉は日本語にも中国語にもない。

B：祖父母と孫

祖父母と孫との組み合わせを表わす言葉は、中国語には「祖孫／爺孫／公孫」（祖父と男孫）一語があるが、日本語には見当たらない。

② 子と孫

子と孫との組み合わせを表わす言葉は日本語にも中国語にも「子孫」がある。然し、日中両語は同様、子孫全体のことを意味している言葉として使用されている。

③ 親と子

親と子との組み合わせを表わす言葉は、日本語には「親子」、「父子」、「母子」があるが、中国語にはない。父と長男との組み合わせを表わす言葉は、中国語にもないが、日本語には「父兄」があり、それは日本の長男相続制の家族制度の現われとも言えるのであろう。

④ 親の兄弟同士、親の兄弟とその子

親の兄弟を表わす言葉は、中国語には「叔伯」（父方のおじ同士）があるが、日本語には

ない。

親の兄弟とその子との組み合わせを表わす言葉は、中国語には「叔侄」（父方のおじとその子、特に男の子）、「姑侄」（父方のおばとその子、特に男の子）、「舅甥」（母方のおじとその子、特に男の子）があるが、日本語にはない。

以上を合わせて見ると、日中両語とも、縦の血縁の系譜関係の継続を大切にすることがわかる。さらに、中国語の場合は、その血縁のつながりは、男系の祖父の代から孫の代まで追及されるのである。

中国語の場合は、中国の親族関係も父系出自集団のような性格をもっていると考えられる。これと異なり、日本語の親族体系はキンドレッドという性格を持つ双系的親族関係である（正岡寛司氏、1975）。日本語の親族関係は、父系出自集団である同族に対して、親族は核家族の複合体である皆共通の「家」に属する「内」の存在であり、それぞれ「おじ」、「おば」などの位置におかれ、父方であろうと、母方であろうと、これ以上詳しく区別する必要がないのであろう。敢えて、狭い意味での親族内の内外意識と言え、長男相続制の家族制のもとで、長男とその配偶者、子供を中核とする核家族のみは「内」の存在と見られ、それ以外の親族は父系であろうと、母系であろうと、長男の核家族にとってすべて「外」と見られるものであると考えてもよからう。

3. 尊・卑意識

(1) 上位者への絶対尊敬

中国語では、父方、母方を問わず、最上位の世代の長とその配偶者として、最高の敬意が払われる。呼称としては、それぞれ「爺爺、奶奶」、「外公、外婆」と異なるが、親族呼称で呼ばなければならない。

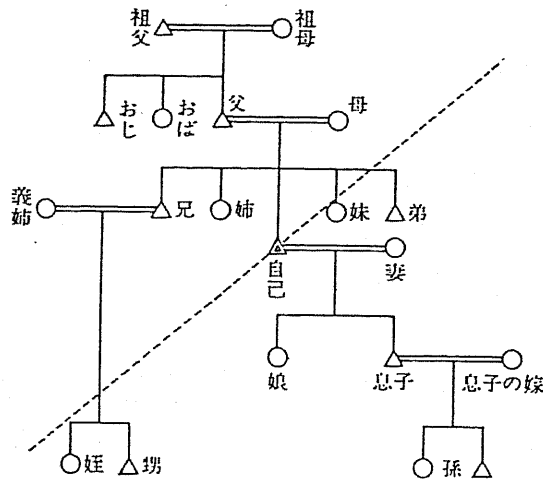
親の兄弟に対しても、「伯父、叔母、舅父、姨媽」など父系母系を問わず、親族呼称で呼びかける。

同世代の年上の兄弟に対しては、「哥」、「姐」のように親族呼称で呼び、年上の従兄弟に対しても、男系女系を問わず親族呼称で呼ぶ。男系の従兄弟では「名前+哥、名前+姐」、女系の従兄弟は「表哥／名前+表哥、表姐／名前+表姐」と呼びかけている。

日本語でも尊属にあたる親族に対しては、親族呼称で呼ぶ。しかし、同世代の従兄弟に対しては、「名前+さん／ちゃん」と呼ぶことが多いようである。

(2) 目上と目下の原則

日本語の親族関係について、詳しく研究なさった鈴木孝夫氏によると、日本の親族の対人関係において、一番基本となるものは目上と目下という概念であると述べている。目上と目下の軸に従って、上と下で異なる用語を使用するという非対称的なパターンが原則となっていると指摘、次の図をもって、親族関係の原則を説明している。



(『ことばと社会』47ページより 中央公論社昭和50年)

鈴木氏の考察によれば、親族内の呼称には、次のような原則がある。

①目上の親族に対して、名前だけ又は人称代名詞を使って呼びかけることはできない。通例親族名称で呼ぶ。

②目下の親族に対して、名前だけ又は人称代名詞を使って呼びかけることはできるが、親族名称で呼ぶことはできない。

従って、祖父母、親、おじ、おばなどの尊属及び兄、姉、年上の従兄弟など同世代の年長者、つまり目上の親族に対して、親族呼称を使用するが、姪、甥、子、孫などの卑属及び弟、妹、年下の従兄弟など同世代の年少者、つまり目下の親族に対して、日本語では、「姪、息子、弟」など親族名称で呼びかけることは有り得ない。

中国語の場合は殆どこれに当てはまるが、目下の兄弟にも、親族名称で呼びかけることができる点は日本語と異なっている。しかし、この場合は、「大妹、二妹」のように長幼の区別をするために使用されることが多い。目下に対しては、名前の呼び捨てが殆どである。

4. 長幼・序列意識

(1) 親族語彙における長幼を区別する意識は日本語にも中国語にも見られる。

①親の兄弟

中国語では、父方のおじを父より年長であるか否かにより「伯父」と「叔父」と呼び分ける。「伯父」或いは「叔父」が二人以上いる場合には、「大伯」、「二伯」……、「大叔」、「二叔」……のように区別される。

男系家族制のもとに、父方のおばと母方のおじ、おばには長幼により名称を区別することはないが、出生順に従って長幼を区別することは勿論である。この場合は、父方のおじと同様に、「大～」、「二～」を冠して呼び分けるほか、父又は母を基準にして、「大～」

「小～」と区別することもある。

日本語では、父方であるか母方であるかを問わず、両親より年上であるか年下であるかにより、「伯父」「叔父」、「伯母」、「叔母」と区別するための漢語系の語彙があるが、大体「おじ」、「おば」という。おじ、おば同士の出生順に従って長幼を区別されることはない。父より年下のおじが二人以上いる場合に、区別するというなら、日本語では「横浜に住んでいるおじさん」等と表現されるが、中国語では「住在横浜的二叔」(横浜に住んでいる父より年下の二番目のおじさん)と具体的にいうのが普通である。

②兄弟姉妹

兄と弟、姉と妹が区別されるのは、日本語においても同様であるが、中国語のほうは長幼を区別する意識は兄弟姉妹同士の親族呼称にも反映している。兄弟が二人以上いる場合は、「名前+哥/姐/弟/妹」又は「大哥」、「二哥」……、「大妹」、「二妹」……のように呼びかける。

子供の長幼の順については、性別を入れて、出生順を表わす言葉は、日本語には、「長男」、「次男」、「三男」……、「長女」、「次女」、「三女」……、中国語には、「長子」、「次子」、「三子」……、「長女」、「次女」、「三女」……のように、日中両語にも見られる。しかし、性別を入れなくて、子供の出生順を表わす言葉は、中国語には「老大」、「老二」、「老三」……のようにあるが、日本語には見当たらない。

(2) 親族関係を表わす合成語

①親と子

前述したように、親と子との組み合わせを表わす言葉は日本語には「親子」、「父子」、「母子」があるが、中国語にはない。その代わりに、「父子」(父と息子)、「父女」(父と娘)、「母子」(母と息子)、「母女」(母と娘)のようなその倫理関係をはっきり表わす言葉がある。

②兄弟姉妹

日本語にも中国語にも「兄弟」、「姉妹」という組み合わせを表わす言葉はあるが、そのほか、中国語には、兄弟姉妹の間の組み合わせを表わす言葉として、「哥姐」(兄と姉)、「哥弟/兄弟」(兄と弟)、「姐妹」(姉と妹)、「姐弟」(姉と弟)、「弟妹」(弟と妹)が挙げられる。

前節で挙げられた親族関係の合成語と合わせてみれば、中国語では、上下の世代の間においても、同世代の間においても、倫理関係、上下、長幼の序列関係ははっきりとこれらの言葉に表わされている。

(3) 中国語の「輩分」と日本語の親族呼称の虚構的用法

上に見たように、中国語においては、世代により親族間の尊卑関係を表わすほか、同世代の親族の間も長幼の序ははっきりと峻別され、これを乱すことができない。従って、親族関係の序列を正しく表わす必要がある。そこには、「輩分」、「輩数」(世代、親等などによる長幼の序)が明確に意識されている。親族間の対称においては、母は父に対して、日

本語のように「お父さん」、「パパ」と呼ばず、必ず個人の立場から人称代名詞の修飾語をつけて、「孩子他／她爸」（～ちゃんのお父さん）のように所属関係をはっきり表わす。親と子供の名字においては、兄弟同士は輩分を表わす字、又は同じ字を使ってもいいが、親の輩分を表わす字、又は親の名字と同じ字を使うことは、上の者を犯す（「犯上」）ことになるからいけない。この輩分意識は親族外で用いられる時にも働いている。父が「～哥」と呼ぶ場合、その人は自分にとって、「おじさん」の存在となり、その人が父より年上であることにも配慮して、「伯父」と呼ばなければならない。また、口論の際、相手を「孫」と呼ぶこと、又自分が「爺爺」（おじいさん）と呼ばれることは、軽蔑に値するなど、このような場合にも親族名称が用いられることがある。

日本語には親族間の呼称における「目上と目下」の原則があるにも拘らず、親族の最年少者の立場から、相手と自分の関係を見て把握するという「親族用語の虚構的用法」が存在している。鈴木孝夫氏はこれを日本語の親族呼称の目立った特徴として指摘している。（『ことばと文化』）

もともと、親族用語は、性質上「自己中心語」に属する。（Bertrand Russell による）自分が「父」と呼ぶ人は、自分にとってのみの父であり、他人から父と呼ばれる対象ではない。他人の父を言う時は、「誰々の父」のように修飾することにより、「父」といった自己中心語の原点を明確にさせるわけである。

中国語での親族用語は、子供の立場に立って人間関係を見ており、その自己中心性を失うことなく用いられている。しかし、日本語では、母も父に「お父さん」や「パパ」と呼ぶように、この原点の移動が明示されていない。鈴木氏の指摘によれば、日本語の「父」や「母」のような親族語は、親族用語の相対性を失い、実は固有名詞として機能しているという。それは親族間の尊卑関係と相反するのではなく、自分及び相手を含む親族体系の相互位置を確認する方式であろう。一軒の家には、相手を一人の個人と見ないで、親族という秩序階層をもとに、祖父、祖母、父、母など、その各人が共通の「家」におかれる位置づけを言語的に表わしたものである。

5. 連帯意識

鈴木氏の指摘のように、日本語には、血のつながらない他人に対して、親族用語が使用されることがある。この種の親族用語の虚構的用法は、例えば、子供が近所の年配の人に対して、「おじさん」、「おばあちゃん」と呼ぶこと、客が店員を「おねえさん」と呼びかけたりするように使用される。

中国語の親族語彙にも同様の用法が見られる。子供が近所の年配の人、または親の同僚に「李大伯」（李おじさん）、「張叔叔」（張おじさん）、「陳阿姨」（陳おばさん）のように、「名字＋親族名称」の形で呼びかける。

以上のように、親族名称は、親族の枠を越え、身内と非常に親しい関係にある者、また

はある特定の場においても及んで用いられている。

しかし、その適応範囲、使用者及び使用対象については、中国語のほうが日本語より広いようである。

一般的に、日本語においてこれらは年配者や子供に限られて使用されることが多く、中国語では、年齢に関係なく使われている。大人は子供に対して「小弟弟」(小さい弟ちゃん)、「小妹妹」(小さい妹ちゃん)のように呼びかけ、子供は自分より年上の10代、20代前半の若者に対して「大哥哥」(大きいお兄ちゃん)、「大姐姐」(大きいお姉ちゃん)のように呼びかける。いずれも自分と相手の年齢、輩分の距離に応じて、「伯」、「叔」、「爺」、「哥」、「弟」などの親族呼称で呼ぶのである。

これらが親しい者に限られた場所にのみ使われている日本語に対し、中国語では、日常のあらゆる場面で見られるのが普通である。市場や商店や町でまったく面識のない人に対し、親族名称で話しかけて、道を尋ねたり、買い物をしたりする。親は通りすがりの男性に対しても、「叔叔」(おじさん)と呼びかけて挨拶をするよう子供に働きかける。親族語彙の挨拶の機能は、家の中でもよく機能している。子供や大人が帰宅時、「媽！」(お母さん!)と呼びかけるのは、日本語の「ただいま！」と同様である。

さらに中国語の親族語彙は職場の同僚の間にも使用できる。筆者の以前の職場では、世代や地位が同じである同僚に「～哥」(～お兄さん)、「～姐」(～お姉さん)と呼びかけ、上の世代の同僚には「～伯」(～おじさん)、「～姨」(～おばさん)と呼ぶ人が少なくない。自分の上司に対しては、敢えて「～叔」(～おじさん)、「～姨」(～おばさん)と呼ぶ人もいた。

このように、人々は互いに他人であることを意識しつつ、なお一定の連帯感で結ばれているという「仲間」の領域において、「親」なる連帯意識を反映する親族語彙を用いることで、「ウチ」の連帯意識を持たせ、人間関係を円滑させるのである。

次に、親族外への拡張という親族用語の用法の原則において述べる。日本語の場合、鈴木氏の考察によると、親族名称の親族内における「目上と目下」という原則が、殆どそのまま、親族外の社会的状況にも拡張的に当てはめられるという。これについて、本文では、具体的に考察しないことにするが、親族語彙を用いて親族外の人に呼びかける場合、親族内の人に呼びかける時の原則も働いているようである。

日本語では、親族用語を用いて呼びかける時、年上の人に対して「おじさん」、「おばあちゃん」、若い男女や年下の子供に対しても、「お兄さん／お兄ちゃん」、「お姉さん／お姉ちゃん」と言うなど、上位の親族にのみ使用される親族語彙で呼び、「弟」、「妹」のような下位の親族語彙で呼びかけていない。これは、「目下の親族語彙を使用しない」という親族内における親族語彙の用法と一致していると考えてよいであろう。家族内の呼称の場合と同様に、話者より上の地位を表わす名称のみが呼びかけ語として二人称代名詞的に使用できるという原則が、他人を呼ぶ場合にも当てはまることである。従って、その人の年齢、性別などに応じて、「おじさん」、「おばあちゃん」などと呼ぶことができて、自分

より明らかに年が下の男女に対して、弟や妹という概念を含む言葉で話しかけることはできない。互いに親密なる連帯感を持たせるために親族外の人に親族語彙を使用するわけであるが、そこにも、一貫した「目上と目下」という意識がやはり働いているようである。

中国語でも、日本語と同様、連帯感を持たせるため親族語彙は度々使用され、さらに、「目上と目下」という尊卑意識も働いている。そして、中国語では、序列、長幼の意識も強く働くため、その長幼の秩序を明確にさせることが要求される。それゆえに、目下に対しても「弟」等の親族語彙を使用するのである。目上に対して、単に「おじさん」と呼ぶのではなく、自分とその人との輩分、長幼関係も考えて、「伯か」、「叔か」、「哥か」を選択する。

中国語には更にもう一つ興味深い現象がある。親族外の人に親族語彙を使用する時、どんな語彙が用いられるかを見てみると、男性には、「爺爺」(父方のおじいちゃん)、「伯」(父方の年上のおじ)、「叔」(父方の年下のおじ)、「哥」(おにいさん)、「弟」(弟ちゃん) などがあり、父系の親族語彙が多く使用される。女性と先に知り合った場合にも、その配偶者を「姨父」(伯/叔父 母方のおばの旦那の意)、「姐夫」(義理のお兄さん 姉の旦那の意) と呼ぶのは殆どなく、「叔」(父方のおじさん)、「哥」(お兄さん) と呼ぶのが多いようである。女性には、「奶奶」(父方のおばあちゃん)、「姑姑」(父方のおば)、「伯母」(父方の年上のおじの嫁)、「嫂子」(義理のお姉さん 兄嫁)、「姐」(お姉さん)、「妹」(妹ちゃん) などがあり、使用される母系の親族語彙は「姨」(母方のおば) と一語だけであり、父系の親族語彙が多く使用されている。親族語彙が親族外の人に用いられる時にも、男系女系による「内・外」意識も働いて、親愛関係を表わすために、「内」と見なす親族語彙は多く選択され、使用されているようである。

そうであるならば、親族外の人に親族語彙を用いて使用する場合は、日中両語とも、親愛なる連帯関係を結ぶために使用され、またそれぞれの親族内に使用される時に働いている諸意識や原則は、そのまま親族外の場面をも支配していることが言えよう。

第三章：言語意識とその文化的社会的背景

(一) 自他の対立と中国の対人関係

中国社会では従来、円滑な人間関係や社会秩序を維持するために、「礼」と呼ばれる必要な倫理的規範は規定された。

対人行動における礼について、孔子は次のように語っていた。「君子敬而無失、與人恭而有礼、四海之内皆兄弟也。」(君子は敬して失なく、人と恭しくして礼あらば、四海之内は皆兄弟たり。『論語』 金谷治訳注 1963 岩波書店) 礼の基本は秩序であり、「天地」、「男女」、「夫婦」、「父子」、「君臣」など対立の両極におかれる上下、尊卑の秩序を守らなければ、社会の調和は取れない。「天地」という宇宙の秩序から家族の秩序が生まれ、家族の秩序から社会の秩序が成り立ち、さらにこの社会の秩序から礼儀作法が定められる。

従って中国における人間関係は、基本的に自他（内外）関係、つまり自己と相手、第三者を含めた他者との関係である。しかも、この自他関係は同化されることなく二極対立して、人間の基本的秩序を構成している。親族語彙に見られる自他関係は男系と女系、尊属と卑属、長と幼といった歴然とした秩序に反映されている。親族語彙は、親族間、また親愛的連帯関係を結ぼうとする親族外の人に使用される時にも、この自他関係を言語的に如実に表わしているのである。

（二）自他の同化と日本の対人関係

人間関係は、一般的に上下の縦軸に分極し、上には極度の敬意を表わす必要があるとしている。

鈴木氏が指摘したように、日本語の親族の対人関係は、一番基本となるものは目上と目下という概念である。そして、その原則は親族外の社会にも拡張され、社会的通念となっている。それは中国における「上下、尊卑」概念と等しいことであると考えてよかろう。

然し、自己と相手、第三者を含めた他者といった自他（内外）関係においては、日本語では、この両者を対立させるのではなく、むしろ同化させるようである。

言語的事実として、相手の立場から人間関係を見て、呼称を決定するといった親族用語の虚構的用法が挙げられる。子供との会話で、子供の立場に立って、自分の父のことを「おじいさん」と呼んだり、自分のことを「お父さん」と言ったりする。日本の男性は、場面と相手により、「私」と「僕」と「俺」を使い分けている。このように、相手との関係を位置づけたのち、自己をどのように把握し、表現していくかという心理的同一化によって、同一されるのである。鈴木氏は、日本人のこの言語的自己規定の特徴を相対的对象依存型と呼んでいる。（『ことばと社会』 54ページ）

日中両語の親族語彙においては、縦には「上下、尊卑」意識、横には「自他、内外」意識が親族名称の体系を支配しており、親族関係、さらに社会全般の人間関係を大きく左右していると言えよう。それは、日中両語に共通した点であると考えられる。然し中国語の自他（内外）関係は、絶対的秩序による対立した関係であるのに対して、日本語における自他（内外）関係は、同化できる相対的關係にあるのである。中国文化を「尊卑の対立の上、さらに自他の対立を前提として成り立つ文化」であるとすれば、日本文化は「尊卑の対立の上、自他を同化させることを前提として成り立つ文化」であると言えよう。これは日中両語における待遇意識、対人関係の根本的な違いと言えようか。そして、この相違は日中両語の親族語彙だけでなく、社会一般の呼称など、またその他の言語的形式にも及んでいることが考えられるであろう。

おわりに

以上は祖父母の代から孫の代まで僅か5代の親族語彙について考察したものであるが、これらの記述はすべてを網羅できたものではない。そこからその親族語彙に一貫した原理を見出すには、もっと詳しい検討、また自称、人称代名詞など、他の面からも実証的に検討すべき点が残されていると思うが、今後の研究に譲ることにしたい。

家庭は社会の最も基本的な単位である。家族、親族関係も人間関係の重要な一部であるということは否定できない。親族関係が人間関係の基本であるように、親族名称は人間関係を表わす言語的形式の反映であると言えよう。

親族語彙に見られる「上下、尊卑」、「自他、内外」意識は親族外の一般社会にも拡張していることは言うまでもない。これらの意識は具体的に、どのような言語的形でどのように呼称として反映され、人間関係を支配しているのであろう。

また、中国においては、経済成長優先に伴う旧時の呼称の復活と呼称の世代交替のほか、「一人っ子政策」による核家族の進展の加速につれて、「兄、弟、姐、妹、伯、叔、姑、姨、舅」など一部の親族名称の姿が消えてしまうことが予測できる。そうなれば、親族語彙に見られるこれらの待遇意識は存在し得るか、存在するとすれば、どのような形で親族関係、人間関係を反映し、支配するのであろう。これらも、今後の課題となる。



参考文献：

- 水谷修編 『講座日本語の表現 1 表現の基礎』 筑摩書房
野村雅昭編 『講座日本語の表現 2 日本語の働き』 筑摩書房
久野暲 『談話の文法』 大修館書店
北原保雄 『日本語文法の焦点』 教育出版
『日本語の世界 6 日本語の文法』 中央公論社
森田良行 『語彙とその意味』 アルク
『日本語の類意表現』 創拓社
外間守善、佐川誠義編 『日本言語学要説』 朝倉書店
内間直仁 「琉球方言及び日本語研究における一つの視座 — ウチソト意識を中心に —」
内間直仁 「琉球方言からみた助詞〈が〉〈の〉の変遷」 1994年
石田敏子 『日本語教授法』 大修館書店
佐治圭三 『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』 ひつじ書房
佐治圭三 「中国人学習者の間違えやすい敬語表現」(『日本語学』1983年1月 明治書院)
辻村敏樹 『敬語の史的研究』 東京堂出版
林四郎 南不二男編 『敬語講座 1 敬語の体系』 明治書院
同上 『敬語講座 6 現代の敬語』
『敬語講座 7 行動の中の敬語』
『敬語講座 8 世界の敬語』
『敬語講座 9 敬語用法辞典』
『敬語講座 10 敬語研究の方法』
大野晋 柴田武編 『岩波講座 日本語 4 敬語』 岩波書店
同上 『岩波講座 日本語 2 言語生活』 岩波書店
香坂順一 『中国語研究学習双書 1 中国語の基礎知識』 光生館
大河内康憲編 『日本語と中国語の対照研究論文集(上、下)』 くろしお出版
池田 裕 「待遇表現の諸相〔2〕 待遇度の設定」(『月刊言語』1995年6月 大修館書店)
木村英樹 「中国語の敬語」(『月刊言語』1987年7月)
輿水優 「中国語における敬語」(『岩波講座日本語 4 敬語 岩波書店)
井出祥子 「現代の敬語理論 — 日本と欧米の包括へ —」(月刊言語1987年7月)
井出祥子、彭国躍 「敬語表現のタイポロジー」(月刊言語1994年9月)
彭 国躍 「近代中国語の敬語の語用論的考察」(『言語研究』103 1993年)
鈴木孝夫 『ことばと文化』 岩波書店 昭和48年
鈴木孝夫 『ことばと社会』 中央公論社 昭和50年
鈴木孝夫 『ことばの人間学』 新潮社 昭和53年
上野恵司 「ことばの文化背景 — 日中両語の親族語彙について —」

(『中国語51話 ことばの文化背景』 白帝社)

- 董 将星 「中国語の対照詞をめぐって」(『言語生活』1986年7月)
蘇 徳昌 「中国語—日中の呼称—」(『講座日本語12 外国語との対照Ⅱ 明治書院)
葉 氷瑩 「台湾における中国人の親族間の呼びかけ言葉について」(『中国語』1989、2)
陳 建民 「中国語の呼称について(1~3)」高橋由利子訳(『中国語』1990年4~6月)
高橋みな子 「英語にみる夫婦の相互呼称」(『言語生活』362 1982年2月)
米田正人 「夫婦の呼び方—アンケート調査の結果から—」(『言語生活』416 1986、7)
渡辺友左 「福島北部方言の親族語と形容詞の語彙体系」

(『ことばの研究』1967 国立国語研究所論集 3)

- 氏家洋子 『言語文化学の視点』 おうふう
足立 明他共著 『文化と現代世界—文化人類学の視点から—』 嵯峨野書院 1992
光吉利之他編集 『日本の社会学3 伝統家族』 東京大学出版社 1986
田中春美、田中幸子編著 『社会言語学への招待—社会、文化、コミュニケーション』
ミネヴァ書房 1996、4

- 劉 徳有 『日本語の面白さ』 サイマル出版会
西条 正 『日本人與中国人』 重慶出版社 1994
王 永宏編著 『民間民俗通書』 中州古籍出版社 1994
陳 仁鳳主編 『中国概況』 上海教育出版社 1994、6
李 宗桂 『中国文化概論』 中山大学出版社 1988、10
王 献忠 『中国民俗文化與現代文明』 中国書店 1991、12
濱嶋 朗他編 『社会学小辞典[増補版]』 有斐閣 1993、6
『日本国語大辞典』 小学館

(ちん ろ・千葉大学文学部研究生)